

日本社会心理学会会報

194号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 池田謙一

113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科 池田研究室

2012年4月27日

第56回公開シンポジウム

「現代医療と心理学： 医療におけるコミュニケーション」へのお誘い

上野徳美・遠藤由美

最近の医学や心理学の研究は、人の健康維持や病気の発生に個人の生活習慣、パーソナリティ、ストレス、ソーシャル・サポート、人間関係のありようなどの心理社会的要因が深く影響していることを明らかにしています。近年の超高齢社会やストレス社会、食の欧米化など社会構造やライフスタイルの変化により、がんや生活習慣病、慢性疾患、ストレス関連疾患が増加しており、その診断、治療、予防、介入には、心理学の知識と技術が欠かせません。全人的医療を実現するためには、人の心や行動、人間関係などを実証的に探求する心理学の知識と素養が医療者に求められる時代になっています。実際、このような問題意識から欧米の医学校などでは1970年代より心理学や行動科学を医師資格試験の必須科目にしています。また、北米の医学校・医学部では、1校当たり平均28名の心理学の研究者や実践家が教育や研究、臨床に携わっているとされています(Matarazzo, 1993)。基礎心理学であれ、臨床・応用心理学であれ、医学・医療とのかかわりや結びつきはかなり深まっている状況にあります。

第56回のこの公開シンポジウムでは、現代医療と心理学のかかわりや連携について、医師、看護師と心理学専門家の3者にそれぞれの立場から自由にお話をさせていただきます。現代医療と心理学の関係や連携のあり方を考える一助になればと考えております。

大分には、別府温泉や湯布院をはじめ、九重連山などの美しいやまなみ、豊後水道の新鮮な海の幸、美味しい地酒、地焼酎など誇れるものがいろいろあります。空港のある国東半島は奈良時代から平安時代にかけて六郷満山と呼ばれる仏教文化が栄えたところで、今もその遺跡が半島の至る所に散在し、み仏の里と呼ばれています。半島の付け根には全国4万八幡神社の総社で、秀麗な社殿をもつ宇佐神宮もあります。現在、国東半島と宇佐神宮の世界遺産認定を目指して活動が行われているところです。シンポジウムのついでにいろいろな大分を楽しんでいただければ幸いです。みなさまのご来県・ご参加を心よりお待ちしております。

《プログラム》

日時：2012年6月2日（土） 13時30分～16時30分

会場：アイネス（大分県消費生活・男女共同参画プラザ）2階

大会議室 〒870-0037 大分市東春日 1-1 TEL097-534-4034

(次ページに地図掲載)

ショーン・サイエンスとアートの視点からー

松原啓子（大分県看護協会会長）「看護職がいきいきと働きつづけられるためにーメンタルヘルス・サポートの観点からー」

久田 満（上智大学総合人間科学部教授）「インフォームド・コンセント時代の患者-医療者関係ーどうしたら分かり合えるのかー」

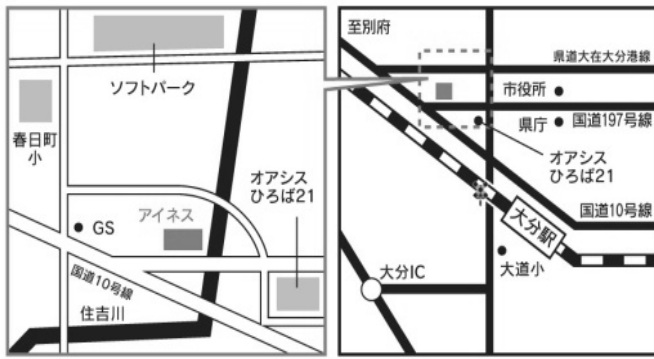
企画・司会 上野徳美（大分大学医学部）、遠藤由美（関西大学社会学部）

○シンポジスト

中野重行（大分大学名誉教授 大分大学医学部創薬育薬医療コミュニケーション客員教授 国際医療福祉大学大学院特任教授）「医療コミュニケー

● 今号の主な内容

- 【1面】第56回公開シンポジウムへのお誘い
- 【2面】学会広報検討特別委員会、発進準備完了：東日本大震災サイトの今後について
- 【3面】東日本大震災に際して社会心理学者に何が出来たのか/何ができるのか（その4）
- 【4面】若手研究者奨励賞の募集時期：〆切りは今年9月末日です。2ヶ月繰り上げです
若手会員、声をあげる：鈴木貴久 池田浩
- 【6面】社会心理学を支えていただいている方々
- 【7面】新入会者名簿など



会場案内図

JR 大分駅からタクシーまたはバスで5、6分、徒歩で15分

《開催趣旨》

今日のストレス過多社会、超高齢社会を反映して、医療や健康に対する国民の関心は高く、健康への不安を3人に2人が感じていると言われています。実際、うつ病や自殺、認知症、がん、再生医療、生殖医療、医療事故、地域医療、医師の偏在、燃え尽き、離職問題、医療ツーリズムなど、医療や健康に関わるトピックスが連日のようにメディアによって報道されています。

医療の現場では、医師や看護師をはじめ、薬剤師、臨床検査技師、栄養士、理学療法士、臨床心理職、事務職等々、多様な職種の人たちが日夜、治療やケアに励んでいます。どのような職種であれ、医療は人と人との関係やコミュニケーションを基盤として成り立つ仕事です。医療者と患者・家族あるいは医療者相互の緊

密なコミュニケーションがなければ、医療やケアは成り立ちません。コミュニケーションのありようによって、医療者と患者・家族の信頼関係や治療効果が左右されるといっても過言ではないでしょう。

本シンポジウムでは、今日の医療の諸問題に対して心理学・心理学専門家が貢献できること、医療者が心理学・心理学専門家に期待すること、力を借りたいと思っていることの双方の視点から、とくに「コミュニケーション」を大きなキーワードにして「現代医療と心理学」のかかわりや連携、今後の課題について考えます。

今回は、医師、看護師、医療問題に詳しい心理学専門家の3人をお招きし、それぞれの立場から話題提供していただきます。まず、中野重行先生から豊富な臨床経験と研究をもとに医療コミュニケーションの問題を科学的側面とアートの側面からお話をさせていただきます。次に、松原啓子先生からは、安全で安心な医療や看護を提供するためにはメンタルヘルス対策と労働条件の改善が欠かせないとの観点から、看護職のメンタルヘルス・サポートの問題についてお話をさせていただきます。そして、久田満先生にはインフォームド・コンセントが重視される今日の患者と医療者の関係のあり方や、患者と医師は分かり合えるのかというテーマについて、心理学の立場から論じていただく予定です。フロアとの交流を重視したフロア参加型シンポジウムにおいてみんなでよい医療を考える場となるよう、多くの方々のご参加をお待ちしております。

(うえのとくみ、えんどうゆみ)

学会広報検討特別委員会、発進準備完了

安藤清志会長

前号では、学会広報についての考えを述べさせていただきましたが、今回はその後の進展について報告することにします。まず、前回の常任理事会において「学会広報検討特別委員会」を一年間の期限付きで設置することが決まりました。委員会設置に関しては「言い出しっぱ」であることと後述の理由により、私自身が委員長を務めることになりました。委員は、池田謙一（広報担当常任理事）と三浦麻子先生、五十嵐祐先生（いずれも広報委員）です。この委員会では、まずは、大震災の直後に立ち上げたリンク集を今後どうするかを検討することになります。災害時あるいはその前後の心理的問題に関する情報を、学会としてどのように提供することが可能か具体的に検討した上で、早い時期に実施に移せればと思っています。さらに、できればこれをモデルとして、提供する情報の範囲を拡大

していくことを考えたいと思います。災害に関連した問題以外にも、社会心理学が社会に向かって提供できる情報はたくさんあります。

もう一つ、前号では社会心理学会と日本心理学会との関係について触れましたが、今回設置する学会広報検討特別委員会と日心側の委員会を重ね合わせることで、両学会が協力して問題を解決する体制をとることにしました。日心側の委員会は、「東日本大震災復興支援特別委員会」です。この委員会は、日本心理学会が昨年おこなった「震災からの復興のための実践活動および研究」への助成（今年度については現在応募受付中 [5月7日〆切]）を具体的に実施することが主な仕事ですが、その他にも日本心理学会がホームページに立ち上げた「東日本大震災関連ページ」の今後のあり方についても検討することになっています。現在、この委員会の委員長を私が務め

ていることもあり、今度設置する社会心理学会の特別委員会でも委員長を務めさせていただきますことによって、2つの学会の共同作業をより円滑に進めることができるのではないかと考えた次第です。また、今回、社会心理学会の特別委員会に入っていたいたお二人は日本心理学会の広報委員でもありますので、日心の「東日本大震災復興支援特別委員会」を拡大委員会にしてお二人に加わっていただくことで、実質的に2つの委員会が大きく重なり、両学会が抱える類似した課題に対等な立場で効率的に取り組むことが期待できます。以上のように、今回はさまざまな偶然も重なり、2つの学会の「インターフェイス」の試作品？ができあがりしました。あくまでもテストケースですが、こうした活動がモデルケースとなり、さまざまな学会との交流が広がっていくことを期待したいと思います。

課題に取り組むための仕組みができて活

動の発進準備は完了しましたが、社会に向けた情報の発信はこれからの作業の成り行きにかかっています。1年後、あるいはも

っと早い時期に、今度は「発信準備完了…」というタイトルで経過報告できればと願っています。

(あんどうきよし・東洋大学)

東日本大震災に際して社会心理学者に何が出来たのか／何ができるのか

(その4)

心残り

石井敬子

先日たまたまNHKニュースで、(株)はてな社長の近藤淳也氏が社員を引き連れて、南三陸で合宿を開いた話を耳にした。その合宿を企画した理由は、近藤氏が京大在学時に起きた阪神淡路大震災の際に、被災地に行かなかったことが未だ心残り、若い社員たちに被災地の現状を見てもらいたいからだという。私自身、同大学の同学年だったものとして、この「心残り」には共感する。それ故、数年前に神戸に引っ越してきた当初は、当時震災に背を向けてしまったことによる若干の後ろめたさを時として感じたものである。

なぜあのとき神戸に行かなかったのか。その理由は、急にボランティアという言葉が乱発され、こぞって人々が神戸に向かう最中、ボランティアなら他にもあるだろう、そもそもその力を継続的に求める人たちや団体は他にもあるだろうと思ったからだ。実際、私は震災以前からボランティアと呼ばれる活動に従事していた。これは生死にかかわる深刻なものではない。相手がありきたりの生活を送る上での単なるパーツに過ぎない。とはいえ、そのありきたりの生活の一部となることで、ボランティアという行為の使命は十分果たされているはずである。当時も今もその考えに変わらない。こうした使命と事態の深刻さは、天邪鬼な私の観点に立てば独立だからこそ、当時の私は神戸に行かなかった。

しかしあれから16年後、近藤氏の心残りに共感してしまうのは、結局のところ、その天邪鬼さから屁理屈をこねくり回して、何らかのアクションをとらなかったことへの自戒に他ならない。屁にも値しない屁理屈を未だにこねるのか？その年でまだ天邪

鬼に酔いしれるのか？

2011年8月、東北に行くと言った同僚に刺激を受け、それとは独立に陸前高田に行き、草取りと瓦礫の撤去をした。そして半年後の2月、山元町で側溝の泥出しの手伝いをした。2回とも自身の非力さを痛感した。とはいえ、たとえ単なる自己満足であろうとも行動しなければ何も始まらない。そして行動しなければ、それは「心残り」という澱にしかならない。

陸前高田から戻った後、ブログにこう書いた。

「そもそも自分が人生をかけて知りたいことを追究できるような職についていることはどう考えても幸せに値するし、私自身もそれに異論はない。ただそれでも心の片隅で世の中の役に立たないことへの一種の虚しさを感じるときがある。今では、年をとって、自分をごまかし、正当化するという一種の対処法を身に着けたものの、学生だったときはいわばその2つの間でいろいろ彷徨い、世の中でいうところのボランティアの末端として現場で身を投じるしか、自分の中でバランスをとることができなかったのを思い出す。」

社会心理学者としては失格だろうが、これが私の偽りのない本音である。時間を見つけて足を運び、現場の末端として身を投じる。そこでできることは、ありきたりの生活を送る上で必要なことのうち、小指の爪の垢にも満たないだろうが、しかしそれでもその生活の一部になりえるのであれば、一ボランティアとしてその行為の使命は十分果たされる。成長のない結論だが、それに尽きる。

(いしいけいこ・神戸大学)

「たら」「れば」を熱心に考えるべき

中谷内一也

「もし、このことが伝えられていたら」、「この条件さえ重ならなければ」、と「たら」「れば」を言うことは否定的に評価されます。たしかに「もし、福島第一原発の非常用電源がもっと高い場所にあつたら・・・」といくら言ってもひどい現状を変えられるわけもなく、詮ないことです。しかし、社会心理学研究者が東日本大震災に関して、「たら」「れば」を考えることは、次の大きな災害に備える上で大切な作業だと思います。そして、「たら」「れば」を考えることで、社会心理学の知見を減災に生かすには何が必要なのかも見えてきます。

ひとつ、例を挙げて考えてみましょう。今回の被害の中で私がもっとも重く感じるのは、亡くなった人たちの死因のほとんどが水死であり、犠牲者は地震後に津波がやってくるまでの数十分から1時間程度は生存していたという事実です。地震直後から高台を目指して大急ぎで避難していれば、助かった命が多くあったことを意味しています。これらのことをもって、人の行動を説明し、予測する専門家であるはずの心理学者が世間から厳しく非難されても仕方ないと思っています。でも、そのような声はほとんど聞こえてきません。そもそも期待されていないのでしょうか。もし、そうならかえって残念なことです。

被災したのは海岸沿いの地域ですから、地震の後には津波が襲ってくるかもしれない、ということは知識としては頭にあつたはずですが、それなのに、迅速な行動はとられなかった。なぜでしょうか。その1つの答えが正常化バイアスです。これは、人が避難を促す警告に接したり、あるいは、災害の予兆が示されたりしても、事態を樂觀

してしまい、なかなか避難行動をとらない傾向を示します。東日本大震災の津波についても、正常化バイアスが被害を大きなものにしてしまったこと示す証言がいくつもあります。

さて、「今回の津波被害では正常化バイアスが被害を大きくしてしまった」と社会心理学者が指摘するのは後知恵なのでしょう。私はそうとはいえないと思います。災害時シグナルによって集団パニックに陥ることのリスクと、シグナルがあるにもかかわらず正常化バイアスによって逃げ遅れるリスクとでは、どちらが大きいのかという問題について、正常化バイアスの方が大きいというのは災害問題に関係する心理学者の間ではむしろ常識だったと言ってもいいでしょう。四半世紀以上前に書かれた池田謙一先生の「緊急時の情報処理（認知科学選書9・東大出版）」には、火山爆発のさまざまな予兆をできるだけ楽観的に解釈しようとする子供達の心情が描写されています。

後知恵ではなく、もし、震災前に「大地震の後に津波から逃れようと集団パニックになる可能性と、むしろ、人々がなかなか逃げようとしない可能性と、どちらが高いですか？」と問われてい**れば**、災害リスクに関係する心理学者は「まずは正常化バイアスのため迅速な行動はなかなかとれない。その後、いよいよ脅威が現前のものとなってからは、特定行動への固執、判断における視野狭窄がみられる」と予想したでしょう。つまり、被害を軽減するための知見は、今回の震災によって初めて教えられたのではなく、すでにわれわれは持っていたのです。では、なぜそれを有効利用できなかったのか。それは研究成果を国民に積極的に伝えていこうとするアウトリーチの

姿勢が足りなかったことと、研究成果を使って避難プログラムを実装化する努力が足りなかったこと、さらにいうと、そういった姿勢や努力を評価するしくみが研究者コミュニティの中で不十分であること、を指摘できると思います。研究成果には一般性が重視され、特殊な状況でしか説明力を持たない知見は価値が低い。そのことは、われわれが論文を書くとき、最後に「本研究の制約は、・・・」とその研究の特殊性をまづいこととして議論し、その制約を越えるための将来の研究を論じて全体を締める、というスタイルが一般的なことからわかります。ところが、研究知見の実装化というのは一般性を前提としたモデル群を特殊な状況に当てはめ、その状況ではうまく機能するが、他の状況への一般性はわからないしくみを作り上げることです。しかも、本当にうまく機能するかどうかは災害が起きるまでわかりません。そのような仕事を高く評価する制度がなければ、多くの研究者がそのような仕事に向かうことは期待できないでしょう。また、アウトリーチを盛んにするには、社会心理学者同士のピアレビューだけではなく、社会心理学外からの評価を社会心理学コミュニティ内の評価に反映させる制度も必要でしょう。「たら」「れば」から減災のためのソリューションを生み出すには、そのような制度があった方がよいと思います。

ただ、制度だけの問題とも思いません。皆さんは群馬大学の片田敏孝先生をご存じでしょう。片田先生は「君が最初に逃げる人になりなさい」と釜石の小中学校で防災教育をされていました。その成果は、子供達の自主的な避難を実現し、犠牲者の発生を食い止めた「釜石の奇跡」として知られています。でも、社会心理学者なら釜石で

起こったことは奇跡なんかでは決してなく、正常化バイアスを考慮し、同調の心理や社会的比較を利用した、たいへん筋の通った指導方法と訓練の賜物であることがわかるはず。片田先生にあって、私を含めた社会心理学者にないものは何だったのか。それは現場に介入し、現実働きかけて社会を変えようとする意欲ではないかと思えます。私は、社会心理学者は人の行動を説明しますがコントロールは避けようとする傾向が強いように思えます。それは、交絡要因だらけの現実に研究成果を適用したときの不確実性を懸念する健全な臆病さと、社会心理学の介入というのは大衆操作であるように感じてしまうことなど、いくつか理由があると考えています。それについて議論するのは別の機会に譲るとして、でも、「社会心理学は何ができるのか」という問いかけに上を向いて答えるには、現実働きかける意欲は不可欠だと思います。

(なかやちかずや・同志社大学)

若手研究者奨励賞の募集時期

学会活動担当常任理事 遠藤由美

若手研究者奨励賞の募集時期が今年度から約2ヶ月早くなり、9月末日締切となります。募集開始・応募要領などはその時期が近づきましたら、学会ホームページやメールニュースなどを通じてお知らせいたします。応募をお考えの方は、見落としのないようご注意ください。

(えんどうゆみ・関西大学)

若手会員、声をあげる

情報工学と社会心理学の融合

鈴木貴久

最近、震災後のツイッターでの情報流通やフェイスブックの利用者数の増加など、ソーシャルメディア関連の話題をよく耳にします。これらのソーシャルメディアの普及には、技術的な発展が一つの土台となっています。私は現在社会心理学を専攻して

おりますが、学部から修士まで情報工学を専攻し、その中でもウェブ上のデータに対してマイニングを行うウェブマイニングと呼ばれる領域を専門にしておりました。当時はまだツイッターもフェイスブックも存在しておらず、技術的進歩の速さに驚くばかりです。今回は執筆の機会を頂けたので、情報工学側から見た社会心理学の魅力につ

いて、私なりの意見を述べたいと思います。

ウェブマイニングは、ウェブ上の膨大な情報の中から、参照する価値がある内容を選び出し、人々が利用可能な形に縮約する技術です。この領域の研究結果は、ウェブ検索やそのランキングに用いられているだけでなく、最近では個人ごとにその人の好みに合った商品や友人まで自動で紹介して

くれるシステムにも活用されるようになり、また、研究の対象であるウェブ全体の情報集合は、ウェブページやブログ・掲示板への書き込みなどの個人の行動が集約されたものです。その中から、利用者にとって価値が高い情報を抽出するためのアルゴリズムを開発するということが目的としています。アプローチの例としては、アルゴリズムの計算効率や価値の高い情報をどれだけ正確に抽出できるかを評価し、その性能について統計的に検証します。これらのプロセスは、ウェブ全体を一つの社会としてとらえれば、個人の行動の集合が社会を作り出し、そこから特定のパターンや価値ある情報を探し出すという意味で、社会心理学と類似したアプローチで行われていると感じています。

この中で特に私が重要だと考えるのは、利用者にとって価値が高い情報とは何なのかという点です。例えば、ウェブ上での人々の行動を分析して友人となる人を選び出す時に、行動が類似している人を抽出すべきなのか、属性が類似している人を抽出すべきなのか、どちらの人が友人として価値が高いのかというような問題は技術だけでは解決できません。このように、本当に価値の高い情報を抽出できているのかを検証するためには、利用者の社会的文脈や心理状態などまで踏まえた考察が必要であり、これは社会心理学の得意とする点です。つまり、情報工学における設計デザインの指針やその評価に至るまで、社会心理学は積極的に提案していける立場にあるのではないかと考えています。

現在私が取り組んでいる研究テーマは、評判の利用による協調行動の達成についてです。評判はオンラインオークションではすでにシステムとして利用されており、利用者が各自で情報を生成すること、それが集約され、利用されることで協調行動が可能になるため、ウェブの技術と相性が良いといえます。今後、より協調行動を引き出すことが可能な評判を生成するための改良に向けても、技術的な側面よりも利用者の心理的・認知的な側面が重要になると信じて研究を行っております。ただし、ウェブマイニングと社会心理学のアプローチ方法に類似点が多いとはいえ、ウェブ上のデータとは異なり、生身の人間の行動は単一のアルゴリズムだけでは説明できず、複数の

理論や解釈が必要になります。この視野の広さが社会心理学の魅力であると同時に難解な点であり、両者の違いを痛感しながら日々研究に取り組んでおります。

以上、ウェブマイニングという情報工学の一つの領域についてのみですが、情報工学へ社会心理学が積極的に提言することによる融合について述べていただきました。自身の研究がその段階まで至っていないため、一つの意見にすぎませんが、本稿を読んで少しでも共感して頂けたら幸いです。

(すずきたかひさ・総合研究大学院大学)

募集停止を経験して得た教訓

池田 浩

今回、縁あって『若手会員、声を上げる』に寄稿させて頂くことになりました。自称(?)若手会員として、この新コーナーを毎号楽しみに拝読していましたが、これまでとはちょっと違う声として、大学の存続が揺らぎ教育や研究の場が失われてしまう「募集停止」という経験を通して気づかされたことを、一人の若手会員として声を上げ学会員の皆様と共有したいと決意しました。正直なところ、「募集停止」という苦い体験を振り返り、文章化するのは初めてで、この体験を原稿にすることにもためらいがありました。しかし、そこで得た教訓を広く大学関係者に伝えることにも意義があると思ひ、重い腰を上げたいと思ひます。

実は、この会報への寄稿は2度目になります。4年前の第177号(2008年3月21日発行)の会報に「大学というところで仕事をしてみて・・・」という企画で寄稿しました。当時は、大学に就職して1年目が終わる頃でした。改めて、その時の原稿を読み返してみると、私が着任した前任校がちょうど学部改組の時期にあたり、新しく心理学系の学科を設立するために心理学実験室の設置や多数の関連図書の購入、あるいは「PsycINFO」などのデータベースの導入など、急ピッチで教育と研究の環境が整いつつあり、希望と期待に満ちた内容が記されていました。小規模な大学でしたが、アットホームな雰囲気でも研究にも理解のある職場でした。また、私生活でも、生まれ育った九州を離れ、兵庫県西宮市へと移り住み、新しい土地の文化に触れ、毎日が楽

しく、また居心地が良く、このまま関西永住?とも少なからず考えていました。

ところが順風満帆かに思えた滑り出しから約1年後、前任校は「募集停止」という重い決断を下しました。

マスコミへの公式的発表を行う前に、在学生を対象に「募集停止」の説明会が開催されましたが、研究者というよりも学生を預かる「教育者」として非常に苦しい対応に迫られる毎日となりました。私が着任した新設学部は開設して2年目を迎えた時期でしたので在学生会は2学年しかいません。1年生は入学して1ヶ月足らずで「募集停止」という重い事実を突きつけられ「なぜ入学させたのか」という怒りと戸惑いの気持ちでショックを隠せずにいました。一方、2年生は「残り3年間どうなるのか」「卒業できるのか」という怒りだけでなく将来の不安に包まれていました。前任校では、アドバイザー制という各学年数名ずつの学生を教員が担当する制度がありましたので、私が担当する学生のやり場のないネガティブな気持ちを毎日受け止めるだけで精一杯でした。

当然、その時の一年間はこうした対応が続いたため、研究に対して十分にエネルギーを注ぐことができず、気持ちを振り絞りながら、何とか締め切りに迫られた学会発表の準備やその他の原稿の執筆に取り組むことしかできませんでした。残念ながら専任教員として前任校の学生への指導は年度末までとなりましたが、第1期生が4年生となる昨年度まで非常勤講師として授業を担当する形でのサポートを続けてきました。集中講義で在学生と会うたびに食事する機会を作り、学生生活や進路のことなどの話を聞くよう心がけました。幸いなことに、残った学生はたくましく、互いの結束力を強め、自分自身で将来を切り開かないといけないという自覚が芽生えているように感じました。第1期生が卒業を迎えた今春、ある学生と会う機会がありましたが、その時に学生が仕上げた卒業論文を頂き、たくましく成長した様子を感じ感慨深いものがありました。

大学に勤務し始めた最初の職場で非常に苦い経験をする事になりましたが、この時私は、大学教員として「学生」を預かることの責任の重大さをこの上なく感じさせられました。私の尊敬するある先生が、ご

自身の教育に関わる座右の名として「学生は自分の子どもと思って育てよ」とある席で話しをされていました。まさに、それぐらいの気持ちを持って学生の教育にあたらなければならないし、また大学という高等教育機関では社会的にもその責任を背負っていることを自覚しなければならないことを感じました。

学会では、学会員の研究成果を発表し、それを議論する場であるため、あまり教育については議論されません。また、若手研究者の多くは任期付きの職に就いているため、次の職への異動を意識して研究業績を重視し、研究と教育とのバランスに苦しみことも珍しくないと思います。しかし、募集停止の経験から、学生を育てるという教

育が安定しなければ好きな研究も十分集中できず、充実した教育の上に研究活動が成り立っていることを強く実感しました。今後の大学教員生活を送る上で大事な教訓として胸に刻んでおきたいと思います。

(いけだひろし・福岡大学)

社会心理学を支えていただいている方々：その4

(株) 誠信書房

松山由理子

弊社はお陰様で今年創業 58 年を迎えます。創業当初より心理学にはことのほか力を入れ、なかでも社会心理学とのご縁は大変深いものがあります。以下創業間もない頃から現在までの社会心理学関係の書籍をざっとご紹介させていただきます。

* * *

弊社で現存する 1964 年の図書目録を繕いてみますと(括弧内は定価)、波多野完治監修『マス・コミュニケーション』(750 円)、大川信明・村田宏雄著『市場操作の心理と技術』(450 円)、村田宏雄・松井寛夫著『職場管理の心理と技術』(400 円)、増田幸一著『作業単調感の心理学』(1500 円)、などの題名が見られます。

発行年が分かるのは、

1955 年外林大作・遠藤辰男・村田宏雄著『社会心理学』(450 円)、村田宏雄他著『社会調査の技術』(450 円)

1957 年になると、心理学叢書、千輪浩監修『社会心理学』(500 円)があります。

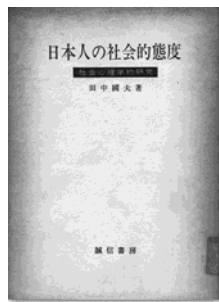
1960 年、早坂・佐々木・平井・牛窪共著『新稿 人間の社会心理』(400 円)、翻訳書で、スーパ著日本職業指導学会訳『職業生活の心理学——職業経歴と職業的発達』(1500 円)、



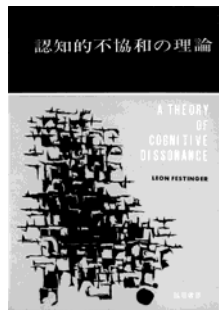
1963 年、ニューマン著(松井・金平・村上訳)『消費者の心理と販売管理』(2000

円)、同年、広田君美著『集団の心理学』(1500 円)、同年、杉溪一言著『職場のカウンセラー——部下指導の心理と技術』(580 円)、

1964 年、田中国夫著『日本人の社会的態度』(750 円)、ここまでの定価は今から見るとかなり安いです。



1965 年、田中国夫著『現代社会心理学』、同年、テキストシリーズ辻正三著『社会心理学入門』、同年、フェスティンガー著末永俊郎監訳『認知的不協和の理論——社会心理学入門』、同年、ホブランド他著辻正三・今井省吾訳『コミュニケーションと説得』同年、南博監修・社会心理研究所編『社会心理史——昭和時代をめぐって』、



1966 年、豊原恒男・正田恒著『安全管理の心理学』、同年、宇都宮仙太郎著『心理学と経営学の探究』、



1967 年、林保編著『達成動機の理論と実際』同年、松山義則著『モチベーションの心理』(1500 円)、

1969・1970 年、カートライト・ザンダー著(三隅二不二・佐々木薫訳編)『グループ・ダイナミクス I・II』、

* * *

ご覧いただくと分かるように、周辺領域とあまり細かい分野分けがされておませんが、現在でも十分に通用する魅力的な題名が並んでいます。時代が変わっても必要とされるテーマというのはそれほど変わらないのかなと思います。

さて、70 年代に入ると、「現代人の病理」全 5 巻シリーズが始まります。

1972 年、加藤正明・相場均・南博編『文化の臨床社会心理学』

1972 年、木村駿・相場均・南博編『人間関係の臨床社会心理学』、

1973 年、滝沢清人・相場均・南博編『家族の臨床社会心理学』、

1974 年、浅井正昭・相場均・南博編『エロスの社会心理学』、

1975 年、荻野恒一・相場均・南博編『臨床社会心理学の基礎』。

1977 年からは、キースラー編広田君美監修『現代社会心理学の動向』全 8 巻の刊行開始。その後、

1978 年、西平重喜著『世論反映の方法』

が出ます。

さらに80年代～90年代になりますと、1986年対人行動学研究会編『**対人行動の心理学**』を刊行。執筆者の皆さんはグループダイナミクス学会の会員も兼ねておられる方が多くおられたことなど思い出します。

1987年～1999年齊藤勇編『**対人社会心理学重要研究集**』シリーズ全7巻を刊行。

1989年～1990年大坊郁夫・安藤清志・池田謙一編『**社会心理学パースペクティブ**』シリーズ全3巻を刊行します。この頃非言語コミュニケーション関連の書籍も出てきて、1987年エクマン&フリーゼン著工藤力訳編『**表情分析入門**』、1988年には、組織論として古川久敬著『**組織デザイン論**』など単行本も沢山出ました。

さらにインターネットが社会に普及し始めたことを反映して、

1993年川上善郎・川浦康至・池田謙一・古川良治著『**電子ネットワークの社会心理**』、宮田加久子著『**電子メディア社会**』を皮切りに、インターネット関連の書籍も登場し始めます。

1996年～1998年『**対人行動学研究シリーズ**』全8巻を刊行。当時は割と新鮮だった四六判の専門書シリーズです。

社会心理学はカバーする範囲が非常に広く、また思った以上に社会の動向と関連して学問が動いていくので興味深い分野で

す。

* * *

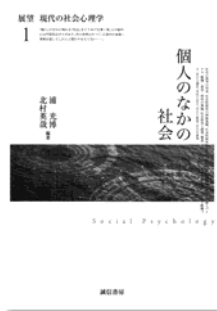
近年は、2007年、チャルディーニ著社会行動研究会訳『**影響力の武器——なぜ人は動かされるのか**』、2009年チャルディーニ他著安藤清志監訳『**影響力の武器 実践編**』など、一般読者、特にサラリーマンにも広く読まれるものを手がけるようになりました。

80年代に本をお出しした若き研究者だった先生方が、現在では学会の理事や重鎮となってお活躍です。

* * *

このように社会心理学との長いお付き合いの結果、2010～2011年には、日本社会心理学会50周年記念企画『**展望 現代の社会心理学**』全3巻を刊行させていただくことができました。このことは大変喜ばしいことでした。以下が各巻の題名です。

第1巻、浦光博・北村英哉編『**個人のなかの社会**』、



第2巻、相川充・高井次郎編著『**コミュニケーションと対人関係**』、

* * * * *

会員異動

(2012年3月1日～2012年4月20日)

■新入会員

《正会員》

・一般会員

赤嶺遼太郎(社会医療法人敬愛会中頭病院臨床心理士)、向後千春(早稲田大学人間科学学術院准教授)、濱野裕貴子(山梨英和大学非常勤講師)、桃木芳枝(名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究生)

・大学院生

エトウ ジョナタン(名古屋大学大学院環境学研究科)、篠原 優(東京大学大学院人文社会系研究科)、竹部成崇(一橋大学大学院社会学研究科)、中妻拓也(立命館大学大学

院文学研究科)、中野祥子(兵庫県立大学大学院環境人間学研究科)、中野友香子(東北大学大学院教育学研究科)、仲嶺 真(筑波大学大学院人間総合科学研究科)、朴 喜静(大阪大学大学院人間科学研究科)、日道俊之(京都大学大学院教育学研究科)、舟戸貴織(名古屋大学大学院環境学研究科)、堀内愛子(立正大学大学院心理学研究科)、弓場美佳子(神戸大学大学院国際文化科学研究科)、吉田悦子(東京大学大学院新領域創成科学研究科)

■退会者

青木修次、浅井千穂、安達知郎、石田京子、上野由貴、氏家悠太、太田 尚、小川憲治、鬼塚佳奈子、加藤奈緒子、金田正一、荻田



第3巻、唐沢穰・村本由紀子編著『**社会と個人のダイナミクス**』。



今後も日本の社会心理学が発展する方向で少しでもお役に立てるような書籍を刊行していければと願っております。また、どちらかという海外の研究紹介が多い社会心理学に日本独自の研究が沢山生まれてくることを心から願っております。

最後に、このような場を与えていただいたことに感謝申し上げます。

(まつやまゆりこ)

最後に、このような場を与えていただいたことに感謝申し上げます。

知則、菊池由希子、岸田孝弥、国佐勇輔、熊田 登、佐々木 薫、孫 珠熙、多賀恵一、高田利武、瀧川哲夫、田之内厚三、二ノ宮卓也、丹羽なぎさ、畠中梨絵、福澤義晴(逝去)、眞岩洋子、松田寛子、無藤 隆、山口真人(逝去)、雪村まゆみ、GEORGE CVETKOVICH、HTUN, TIN TIN

《賛助会員》

(財)吉田秀雄記念事業財団

■所属変更

山岸俊男(玉川大学脳科学研究所)、糟谷知香江(九州ルーテル学院大学人文学部)、浅井暢子(京都文教大学)、菅原育子(東京大学社会科学研究所助教)、渋谷和彦(大学共

同利用機関法人情報・システム研究機構新領域融合研究センター助教)、小林江里香(東京都健康長寿医療センター研究所)、高橋輝(富山大学)、深田博己(広島文教女子大学人間科学部心理学科)、勝谷紀子(青山学院大学社会情報学部/放送大学大学院文化科学研究科)、守崎誠一(関西大学外国語学部・大学院外国語教育学研究科教授)、北村英哉(関西大学社会学部)、大坊郁夫(東京未来大学学長・モチベーション行動科学部教授)、森永康子(広島大学大学院教育学研究科)、内藤哲雄(福島学院大学福祉学部)、柴内康文(東京経済大学コミュニケーション学部)、高井範子(大阪行岡医療大学)、品田瑞穂(東京大学大学院人文社会系研究科助教)、青木俊明(東北大学大学院国際文化研究科)、渋谷明子(創価大学文学部准教授)、平石界(安田女子大学心理学部)、近江玲(お茶の水女子大学文教育学部非常勤講師)、渡部麻美(東洋英和女学院大学人間科学部講師)、竹中一平(武庫川女子大学助教)、前田洋光(京都橘大学健康科学部心理学科)、菅さやか((独)科学技術振興機構 ERATO 岡ノ谷情動情報プロジェクト・情動インタフェイスグループ)、木村昌紀(神戸女学院大学人間科学部)、結城裕也(東洋大学人間科学総合研究所奨励研究

員)、小塩真司(早稲田大学文学学術院准教授)、脇本竜太郎(明治大学情報コミュニケーション学部専任講師)、前村奈央佳(関西学院大学社会学部助教)、大藪博記(早稲田大学経済学研究科)、伊藤安代(東京家政大学家政学部児童教育学科)、小松さくら(同志社大学特任助教)、山崎真理子(京都橘大学健康科学部心理学科助教)、原田知佳(名城大学人間学部助教)、金田宗久(愛知学院大学心身科学部実験助手)、横山ひとみ(東北大学電気通信研究所博士研究員)、笠置遊(立正大学心理学部助教)、荒井崇史(追手門学院大学講師)、大谷宗啓(大阪電気通信大学非常勤講師)、古村健太郎(筑波大学大学院人間科学総合研究科)、荒井紀一郎(早稲田大学政治経済学術院助教)、白井美穂(東洋大学人間科学総合研究所奨励研究員)、津曲陽子(九州大学大学院人間環境学研究院)、上田光世(岩手県宮古児童相談所児童心理司)、大方優子(九州産業大学商学部准教授)、叶少瑜(東京工業大学)、宮本匠(京都大学防災研究所特別研究員)、川人潤子(福山大学人間文化学部心理学科助教)、菅原郁夫(早稲田大学大学院法務研究科)、應治麻美(名古屋大学大学院環境学研究科研究生)、山脇望美(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)、安達菜穂子(大阪

市立大学大学院文学研究科)、森下雄輔(帝塚山大学大学院心理科学研究科)、佐伯昌彦(千葉大学法経学部准教授)

編集後記

公開シンポジウムの1ヶ月前に今号をお届けすべく、3月末の前号に置く間もなく、発行させていただきました。大分大学での魅力的なシンポジウムにぜひご参集を。

また、わが学会の東日本大震災特設サイトの今後を考え、安藤会長が次の提案を書かれています。ご期待とご意見を。

メール・ニュースの広告募集

日本社会心理学会メール・ニュースに掲載する広告を随時募集しております。掲載を希望される方は、日本社会心理学会事務局までご連絡ください。

E-mail: jssp-post@bunken.co.jp

掲載料: 1件(1回あたり)1,000円
(後日事務局より請求書をお送りします。)